

令和元年度 実践研究奨励援助事業 採用校・研究主題等一覧

■ グループ研究部門

| No.          | 校名           | 校長名                     | 研究者代表  | 研究主題   |
|--------------|--------------|-------------------------|--------|--|
| <b>【小学校】</b> |              |                         |        |  |
| <01>         | 宇都宮市立清原南小学校  | 吉住 寛子                   | 大西 誠   | 学び合う仲間づくりを目指して<br>～伝える・つなげる・生かす力の育成～                           |
| <02>         | 宇都宮市立豊郷北小学校  | 石井 和子                   | 北条 諭   | 理科における「深い学び」の充実に向けて  |
| <03>         | 宇都宮市立陽東小学校   | 手塚 浩                    | 杉山 由紀  | 「きれいな陽東」で潤いのある環境を作ろう   |
| <04>         | 上三川町立本郷小学校   | 佐藤 秀彦                   | 森 健    | 「学びの基盤づくり」の研究  |
| <05>         | 日光市立清滝小学校    | 上吉原 こずえ                 | 湯澤 理恵  | 主体的に健康で安全な生活を実践できる児童の育成<br>～生きる力をはぐくむ<br>歯・口の健康づくりを通して～        |
| <06>         | 小山市立東城南小学校   | 青木 清治                   | 青木 陽子  | 新学習指導要領を踏まえた英語科授業の改善<br>～生き生きと英語でコミュニケーションできる<br>児童の育成を目指して～   |
| <07>         | 栃木市立国府北小学校   | 人見 幸吉                   | 吉田 康男  | 多様な遠近表現に気付かせる描画(版画)指導の研究                                       |
| <08>         | 栃木市立西方小学校    | 佐藤 雪江                   | 楡井 雅美  | 主体的に取り組み深く考える子の育成<br>～数学的活動の充実と達成感のある算数の授業づくり～                 |
| <09>         | 下野市立祇園小学校    | 秋山 貴子                   | 熊谷 悠気  | 自分のよさを生かし、互いに学び合い高め合う児童の育成<br>～主体的・対話的で深い学びのための<br>授業づくりを目指して～ |
| <10>         | 那須烏山市立烏山小学校  | 小泉 浩                    | 高田 孝子  | 「気づき、考え、実行する子どもを育てる道徳教育」<br>～考えを深め、判断し、行動する力の育成～               |
| <11>         | 高根沢町立東小学校    | 永井 弘美                   | 西山 翔太  | 児童が喜んで体を動かし、<br>体力と運動意欲を高める指導の工夫                               |
| <12>         | 高根沢町立上高根沢小学校 | 岩村 康朗(令元)               | 小池 正夫  | 「遊びのテーマパーク化」で、<br>体育・運動遊びの日常化を図る                               |
| <13>         | 大田原市立西原小学校   | 篠山 充                    | 千葉 慎太郎 | 若手教員によるOJTの推進<br>～「メンターチーム」による自主研修の実践を通して～                     |
| <14>         | 那須町立東陽小学校    | 深谷 雅明(令元)<br>幡野 勇次(令2)  | 大平 弘美  | 国語科における読む力と書く力の育成  |
| <15>         | 那須塩原市立大原間小学校 | 高久 昭彦(令元)<br>海老澤 康雄(令2) | 阿部 考樹  | 深い学びの実現に向けた授業改善<br>～授業に繋がる評価の研究を通して～                           |
| <16>         | 佐野市立葛生南小学校   | 長竹 克裕                   | 福田 まゆみ | 主体的に考え表現できる児童の育成を目指して<br>～説明的な文章の読みの指導を通して～                    |

| 【中学校】    |                      |           |           |  |
|----------|----------------------|-----------|-----------|--|
| <17>     | 宇都宮市立瑞穂野中学校          | 手塚 弘幸     | 永田 夏子     | 「互いが認め合える学級づくり」について  |
| <18>     | 鹿沼市立粟野中学校            | 高木 誠      | 上澤 高子     | 地域とともに歩む、生徒のコミュニケーション能力の育成                                     |
| <19>     | 矢板市立泉中学校             | 築瀬 のり子    | 齊藤 研一     | メディア使用習慣を改善する取組み   |
| <20>     | 那須塩原市三島中学校           | 玉野 陽一郎    | 玉野 陽一郎    | 新体力テスト日本1に向けて<br>～小中一貫で取り組む体力の向上～                              |
| 【高等学校】   |                      |           |           |  |
| <21>     | 県立宇都宮女子高等学校          | 赤羽 浩      | 小川 浩昭     | 総合的な探究の時間を活かす校内組織の構築<br>～カリキュラム・マネジメントの実現に向けて～                 |
| <22>     | 県立宇都宮工業高等学校<br>(定時制) | 菅野 光広     | 市村 隆幸     | マイコンを用いたロボット製作をおとした<br>ものづくり人材の育成                              |
| <23>     | 県立鹿沼東高等学校            | 梅澤 希人(令元) | 山口 信一(令元) | アクティブラーニングの視点からの授業改善   |
| <24>     | 県立真岡北陵高等学校           | 押久保 徹(令元) | 阿久津 功     | 醜酢竹紛の家畜への利用  |
| 【特別支援学校】 |                      |           |           |  |
| <25>     | 県立盲学校                | 伊藤 美喜     | 伊澤 素子     | 視覚障害者の歩行指導新カリキュラムの開発   |
| <26>     | 県立富屋特別支援学校           | 中田 誠      | 星 祥子      | 特別支援学校(知的障害)における自立課題の工夫と指導<br>～子どもの発達水準に対応できる<br>可変的な教材・教具の作成～ |

戻る

## グループ研究 <01>

研究主題 学び合う仲間づくりを目指して～伝える・つなげる・生かす力の育成～

学校名 宇都宮市立清原南小学校

校長 吉住 寛子

研究者 教諭 大西 誠

### 1 研究目的

児童が自分の考えをもち、生き生きと表現できるようにすることで、思考力・判断力・表現力を育てる指導が充実していくと考える。そのために多様な考えが導き出せるような単元展開や、支援の在り方を工夫していく。

### 2 研究内容

#### ① 思考・表現の可視化ツール

授業者による授業の改善の視点と学習者における学びの改善の視点が往還することが主体的・対話的で深い学びの実現につながる。その手立てとして、考えを進める手続きやそれをイメージさせる思考スキルの図や自分の考えを表現し提示する透明シート等を利用しての学び合いの場の設定を授業に取り入れてきた。



3年道徳 心情メーターで  
心の動きを示す



3年理科 透明シートに  
書きながら話し合う

#### ② 板書の工夫

言語活動の充実を図り、盛んにコミュニケーションが図られている授業を目指し、考えを整理したりまとめたりする際に、思考の変化に対応する動きのある板書を研究してきた。



1年道徳 話し合いの中  
で資料が動く板書

#### ③ 臨時休校時の教材開発

新型コロナウイルス感染症予防による臨時休業中に、児童の学びを止めず家庭学習を進める支援のため、定点観測用カメラ等を利用して教材作成を作成し、学校HPに載せた。また、アサガオの発芽や炊飯の時間による変化の様子を教材化し、授業で学習内容の理解を深めるために活用した。



1教材作成について  
話し合う先生方

### 3 研究成果

児童は話すときに根拠や理由付けを意識できるようになり、自分の考えを整理して述べる力がついてきている。教師は授業研究や教材研究を通して、児童の思考をうながす意図的な授業展開や思考が深まる様々なツールを活用するなど、学校としての意識の共有化や授業力の向上を図ることができた。

### 4 今後の課題

児童生徒の学力を向上させるために、ノート指導についても考える必要がある。今後はノート指導についても、学校全体で検討していきたい。

研究主題 理科における「深い学び」の充実に向けて  
 学校名 宇都宮市立豊郷北小学校  
 校長 石井 和子  
 研究者 副校長 北條 諭 教諭 村山 友梨 教諭 佐藤 奈央子

1 研究目的

小学校では、2020年度より新しい学習指導要領が全面実施される。学習指導要領改訂の方向性の一つとして示されたのが、主体的・対話的で深い学びの視点からの学習過程の改善である。この3つの学びは、「新しい学習指導要領の考え方」(文部科学省HP)に説明はあるものの、実際にどのような学びになるのかは、授業を通して考えていくことが大切になる。

そこで、今回、3つの学びの中で「深い学び」に焦点を当てて研究し、深い学びの視点からの理科学習の改善を行なっていきたい。

2 研究内容

(1) 深い学びをしている児童の姿が表出できるように授業を工夫する。

○栃木県の資料※1から

「深い学び」が実現できた子どもの姿の例として、7つの姿が示されている。

- ・知識・技能を活用する
- ・自分の思いや考えと結び付ける
- ・知識・技能を概念化する 等

○校内研修から

國學院栃木短期大学講師(前筑波大学附属小副校長)森田和良氏を招き、「深い学び」に関する研修をお願いした。

深い理解とは、「知識の関連付け、意味がつながる」こと、理解が深まることとは、「自分の言葉で説明できる・質問に答えられる・類似問題に応用できる」という話をいただいた。

上記の2点から、理科の授業を通して、自分の思いや考えと結びつける場面や、対話的な場面などを設定していく。

(2) 「見方・考え方」を意識した授業づくりを明らかにする。

小学校学習指導要領解説理科編によると、「深い学び」については、例えば、「理科の見方・考え方」を働かせながら問題解決の過程を通して学ぶことにより、理科で育成を目指す資質・能力を獲得するようになっているか(中略)などの視点から、授業改善を図る

こととある。

「理科の見方・考え方」を教師が意識して授業することや児童に意識させていくことを工夫していく。

3 研究成果

児童の変容として、以下の姿が見られた。

(1) 自己評価能力の高まり

授業の最初に、本時の目標に正対する場面や授業の最後に振り返りの場面を設定しているが、それぞれの活動に真剣に取り組む児童が増えた。

(2) 学力テストの正答率上昇

第6学年児童(38名)の、理科における学力テストの正答率は、以下の通りである。

ア 平成30年度とちぎっ子学習状況調査

|        |                              |
|--------|------------------------------|
| 宇都宮市   | 物質 61.7% 生命 62.4%            |
| 本校(5年) | 物質 47.1% 生命 45.0%<br>(一約16%) |

イ 令和元年度市学力定着度調査

|        |               |
|--------|---------------|
| 宇都宮市   | 70.3%         |
| 本校(6年) | 75.0% (+4.7%) |

4 今後の課題

今後、次の3点に取り組んでいきたいと考えている。

- ・理科の研究に止めるのではなく、校内研修などを通して学校全体に広めること。
- ・今後も継続していくために、新たな試みをするのではなく、現在行われている学習活動を「深い学び」の視点で改善していくことに注力すること。
- ・小学校において、各教科それぞれの「見方・考え方」を意識することが大切であるため、本時の目標を明確にすること。

教科の目標を習得するために「深い学び」を充実させていきたい。そのためにも、各教科における「見方・考え方」の視点から授業を改善していきたい。

参考文献

※1「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善(H30.3.31 栃木県総合教育センター)

戻る

## グループ研究 <03>

研究主題 「きれいな陽東」で潤いのある環境を作ろう

学校名 宇都宮市立陽東小学校

校長 手塚 浩

研究者 杉山 由紀 石井 桂 斎藤 潤一 金田 拓也 関 大輔 鈴木 恵美子

### 1 研究目的

飼育栽培委員会を中心にして、本校の特色である「きれいな陽東」を推進するために、花壇の整備・グリーンカーテンの設置・室内の植物栽培・プランターによるチューリップ栽培等を行うことにより、潤いのある環境を作ることができる。

### 2 研究内容

#### (1) 花壇での栽培

10月に「花の輪運動」より花苗を頂いたもので、植え付けた。11月と6月には、購入した苗を植え付けた。また、ヒガンバナ・スイセン等国語の教科書に出てくる花を育てることで語彙を増やす助けとなった。

#### (2) プランターでの栽培

11月13日（水）に全校児童によるチューリップの植え付けを行った。全校児童が交代で水をやり、育てた。入学式は、咲いたチューリップを利用してのガーデン入学式となった。



「チューリップ球根植え」 「入学式」

#### (3) グリーンカーテンの設置と食育と生活科

グリーンカーテンとしてゴーヤ・パッションフルーツ・エアポテト・西洋あさがおを栽培した。エアポテトとゴーヤは、給食の食材となった。西洋あさがおとエアポテトのつるを使って1年生がリースを作成した。



「ゴーヤ収穫」



「ゴーヤチャムプルー」

#### (4) 室内での栽培

11月にシクラメンの鉢を購入し、各学級で育てた。また、6月からは、夏の花や観葉植物を各学級で育てた。

#### (5) どこんじょうひまわりの栽培

震災の中でも咲いたひまわりの種を育てた。取れた種を卒業生や地域の人たちにも配布することにより、震災の記憶をつなぐことができた。

#### (6) コスモスの栽培

小さな親切運動のシンボルフラワーであるコスモスを校門から校舎に通じる道（あいさつロード）に植えた。

#### (7) 草木染

特別支援学級児童は、花壇で育てたマリーゴールドの花でTシャツを染め、合同学習発表会の衣装とした。また、藍を種から育て、マスクやテーブルクロスを生葉染めした。



「合同学習発表会」



「藍染」

### 3 研究成果

季節の花や植物で、潤いのある環境を作ることができた。また、環境を作るだけでなく、食育、生活科の学習、災害教育、国語等の学習に役立てることができた。

### 4 今後の課題

新型コロナウイルス対策のために、令和2年度は、児童の活動が制限されることになってしまった。しかし、できることをがんばり、今後も「きれいな陽東」にしていきたい。

研究主題 「学びの基盤づくり」の研究

学校名 上三川町立本郷小学校

校長 佐藤 秀彦 (令和元年度 増淵 忍)

研究者 教諭 森 健 (代表)

### 1 研究目的

本校では以前より特別支援教育の手法を取り入れた授業改善を進めるなどして、「どの子にも分かる授業」の展開に努めてきた。これを生かしながら、学力の基盤となる諸能力や習慣・態度を改善することにより、一層の学力向上を図ることとした。

### 2 研究内容

#### (1) 互いを認め合う態度の育成

試行錯誤しながら粘り強く学習に取り組む態度を育てるために、学級経営において「一人一人のよさ(個性)・多様性を認めようとする事」「間違えること、できないことを責めないこと」「お互いの良さを生かして互いに高め合おうとする事」を重視した。

#### (2) 自分の考えを記述する力の育成

ホワイトボードに話し合いの結果を書く



各種学力調査の結果等で、本校の児童には自分の考えを記述することへの抵抗を示す傾向が見られた。そこで、各教科の授業で個人の考えを書いたり、話し合いの結果を書いてま

とめたりして、書くことへの苦手意識を払拭できるようにした。

#### (3) 主体性を発揮する場の設定

主体性を発揮して課題を解決しようとする態度を伸長するために「工夫して伝える」場面を多く設定した。例えば、前年度までは教員が指導してきた運動会の伝統種目「本郷音頭」の踊り方を、上級生が下級生に伝えるようにした。上手に踊るためのコツを低学年児童にも分かるように教える様子が見られた。

「本郷音頭」の踊り方を伝える



### 3 研究成果及び今後の課題

今後は以下についての研究を推進して本校児童の「学習の基盤作り」に努めたい。

- ・各教科の基盤となる言語能力の向上策
- ・見通しを持って学習する能力の育成方法
- ・学習習慣をつけるための家庭との連携のあり方の工夫
- ・学習習慣をつけるための家庭との連携のあり方の工夫

戻る

## グループ研究 <05>

研究主題 「主体的に健康で安全な生活を実践できる児童の育成」  
～生きる力をはぐくむ歯・口の健康づくりを通して～

学校名 日光市立清滝小学校

校長 上吉原 こそえ

研究者 養護教諭 湯澤 理恵

### 1 研究目的

生涯にわたる健康づくりの源である望ましい生活習慣の形成につながる歯・口の健康づくりについての研究を進め、学校・家庭・地域・関係機関が連携を図りながら学校歯科保健のさらなる充実を図るとともに、児童の生きる力の育成に資することを目的とする。

### 2 研究内容

#### ① 授業の充実

「清滝歯ッピー弁当を作ろう」

5年生の総合的な学習の時間に、児童が歯・口の健康をテーマとしたお弁当を考案した。お弁当を実現してくださる地域のレストランの方に向けて、児童からプレゼンを行ったり、清滝地区の8020達成者の方々（図1）を試食会に招待したりする等、地域と連携を図りながら実践を進めた。



図1 清滝 8020 達成者

#### ② 体づくりに関する取組の充実

「学校（地域）保健委員会」

日本スポーツ協会公認スポーツ栄養士の鈴木いづみ先生を講師に招き、「小学生の心と体を育む食生活」をテーマに講演をいただいた（図2）。スポーツに取り組んでいる児童の保護者はもちろんのこと、全

ての保護者にとって、家庭での食生活を見直すきっかけとなった。



図2 学校保健委員会

#### ③ 児童主体の啓発活動

- ・6年生から他学年児童へ、低学年児童から次年度の就学児に向けて歯みがき教室を行う等、歯・口の健康について、異学年間で学び合う場を設けた。
- ・給食保健委員会の児童が中心となり、学校歯科医へインタビューを行ったり、よい姿勢についての啓発劇を企画したりする等、主体的に啓発活動を行った。

### 3 研究成果

令和2年7月に実施した「学校生活のアンケート」では、児童の100%が「歯と口の健康を保つために歯みがきや食事に気を付けている」、「運動に親しみ元気に生活している」と回答した。児童の健康に対する意識が高まっていることが伺える。

### 4 今後の課題

保護者と連携した治療率の向上や、仕上げみがきの習慣化に向けて、継続的に働きかけていきたい。また、臨時休業の影響もあり、肥満傾向児童の割合が増加しているため、個別指導の充実を図っていく。

戻る

## グループ研究 <06>

研究主題 新学習指導要領を踏まえた英語科授業の改善

～生き生きと英語でコミュニケーションできる児童の育成を目指して～

学校名 小山市立東城南小学校

校長 青木 清治

研究者 教諭 青木 陽子 早乙女 幸子 毛部川 祐希 丸岡 優一郎

### 1 研究目的

(1) 日常的に英語に慣れ親しみ、自分の思いや考えを表現できる児童を育てる。

(2) 高学年では、段階的に「読むこと」「書くこと」の指導を行い、中学校の英語科の授業につなげる。

### 2 研究内容

○英語専科教諭を中心に、コミュニケーションを重視した授業を展開した。児童と JTE、児童と ALT、児童と児童というように場を設定して、必要性を感じさせながら会話をすることに慣れさせた。

○1年生から、使用する絵カードには文字も書き入れて提示した。

○毎週火曜日を英語の日とし、3年生から6年生まで、各クラス2～3名が英語教室で給食を食べた。英語教室では、基本的に英語を使って会話をすることにしている。

右の写真は、市長・教育長訪問時の様子。



○電子黒板を活用し、教科書の拡大や音声の確認、動画視聴、書画カメラを活用したワークシートへの書き方の例示等を行った。

○段階的に3年生からアルファベットを書くようにした。5年生からは、教科書巻末の絵辞書を活用した。

右の写真は、要請訪問時の授業の様子。興味のある国について話し、必要な英単語をワークシートに記入した。



○今年度は、オンラインによる同学年複数クラスでの授業を行った。時数確保とともに、より綿密な打合せと教材研究ができた。

○教科部会では、新学習指導要領による指導と評価について研修した。

### 3 研究成果

・教師側が意識して多くのインプットを与えることで児童の興味を高めることができた。

・コミュニケーションを中心に見据えた授業を展開することで、児童は、友達や先生と会話することに抵抗がなくなってきた。

・絵カードに単語を書き入れることで、普段からアルファベットを見ることに慣れた。

・5、6年生では、英単語を書く必要性を感じさせることにより、単語を書く意欲を喚起させることができた。

### 4 今後の課題

・クラス増により、英語教室がなくなってしまった。英語に触れる機会や場所を確保したい。

・今年度はコミュニケーション重視の授業ができない状況になっている。新しい生活様式に合致した授業を展開していきたい。

[戻る](#)

## グループ研究 <07>

研究主題 多様な遠近表現に気付かせる描画（版画）指導の研究

学校名 栃木市立国府北小学校

校長 吉田 康男

研究者 教諭 小林 孝裕 教諭 瀬端 成基 教諭 神品 友美 教諭 枝村 直紀

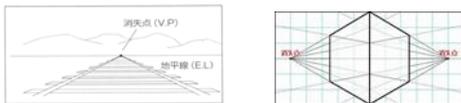
### 1 研究目的

児童に遠近法で表すことのよさや面白さを味わわせ、また、できた作品を鑑賞し合うことで、様々な工夫や表現を認め合い、表現の違いのよさや面白さを感じさせることができる多様な表現法についての指導の実際を研究する。

### 2 研究内容

#### 多様な遠近表現に気付かせる指導法研修会

(1) プレゼンの提示・説明



(2) 廊下のデッサン

(3) 相互評価（鑑賞し合う）

#### 授業研究会の開催（描画：6学年）

描きたい物、描きたい場所

→遠近法の理解により意欲の高まり、  
見通しをもった表現が見られた



【遠近法を意識した作品づくり】

#### 夏休み絵画教室の開催

夏休みに希望する児童に対して、本校出身の画家清水登之の作品から学び表現する絵画教室を行った。



【作品を鑑賞し合う】

#### 多様な遠近表現に気付かせる指導法研修会Ⅱ

(1) プレゼンの提示・説明

(2) 友達の顔のデッサン

(3) 相互評価（鑑賞し合う）

#### 授業研究会の開催（版画：4学年）

初めての彫刻刀の使い方指導

→2時間実施したので、安全に自信を持って取り組むことができた

#### 下野教育美術展参加

入賞の点数が成果とは考えないが、多くの児童が入賞した（中央展23点）団体賞（県市町村教育委員会連合会会長賞）

### 3 研究成果

遠近法を意識して活用する表現の方向性を理解して作品作りに取り組めたため活動への見通しが持て、意欲をもって表現できた児童が多かった。本校出身の画家の表現法を学ぶことはふるさと学習としても有効であると考えた。

### 4 今後の課題

同学年の児童が継続して複数年、表現法を学ぶことによる成長を研究していくことである。

研究主題 主体的に取り組み深く考える子の育成

～数学的活動の充実と達成感のある算数の授業づくり～

学校名 栃木市立西方小学校

校長 佐藤 雪江

研究者 教諭 楡井 雅美 他 15 名

## 1 研究目的

基礎的な知識・技能や、既習事項を生かして、問題を解決する力（数学的思考力・判断力・思考力）を育成するために有効な数学的活動を検討するとともに、児童の「できた」「わかった」姿を目指した授業づくりについて研究する。

## 2 研究内容

### ①新学習指導要領における数学的活動についての共通理解と授業づくり

論理的に考えることが苦手な本校児童の実態から、数学的活動の中の「数学的に表現し、伝え合う活動」に重点を置き、以下について検討を重ねた。

- ・既習事項をもとに、自分の考えを式や図、半具体物を用いて表現させるための教材、教具の工夫
- ・考えを発表させたり共有させたりするための手立ての工夫

### ②基礎的な知識・技能の定着を目指す

MACS-P(元宇都宮大学 原田浩司准教授考案)をもとに、3年生以上を対象に基礎的な計算力の定着の程度を調査した。個人の結果をもとに、定着度別のグループを作り、朝の学習で計算力の習熟を図った。定期的に確認テストを行い、計算力が身に付いた児童は次のグループに移動できるようにした。

### ③一人一人に達成感のある授業づくり

「とち介の学び(栃木市教育委員会)」をもとに、授業のゴールを明確にし、授業で児童

に気付かせたいこと、考えさせたいことをスモールステップで捉え、学習を展開するようにした。また、個に応じた支援への理解を深めるために、特別支援学級の授業を参観したり、少人数指導、通級教室での授業と連携して指導案を作成したりした。

## 3 研究成果

- 図や式を使って考えを表現しようとする力や、自分の考えを友達に伝えようとする力が伸びた。前時までの学習内容を使って考えようとする姿が多く見られた。
- ホワイトボードの活用は、グループ学習をする際に有効な手段であったが、個人の思考の過程や最終的な考えを残すために、ノートなどを併用する必要があることも確認できた。
- 十分定着していない単元に戻り、計算の復習ができる機会を設けたことで、学力テストの結果からも計算力の向上を見ることができた。
- 実態に応じて課題を設定したり、「できた」を積み重ねたりすることで、児童の意欲や自信を高めることができた。

## 4 今後の課題

学習で学んだことから新たな課題を見いだしたり、学習したことを日常の場面で活用したりする力の育成に課題が残った。そのため、児童の主体性に重点をおいた授業づくりについてさらに研究を深めていきたい。

研究主題 自分よさを生かし、互いに学び合い高め合う児童の育成

～主体的・対話的で深い学びのための授業づくりを目指して～

学校名 下野市立祇園小学校

校長 秋山 貴子

研究者 教諭 熊倉 悠気

### 1 研究目的

「知識・理解」を習得し、「思考力・判断力・表現力」の高まった子どもたちを育成することを前提とし、それらの力を課題解決に生かしていく「学びに向かう力」の育成を目指した。また、子どもたちが他者と学び合うことの楽しさを味わうこと、そして、生涯にわたり学び続けようとする態度の育成も図ることを目的とした。

### 2 研究内容

- 理科研修会「星の観察と教材の工夫」（講話・実技演習）
  - ・宇都宮大学教授人見久城先生を招いての研修会の実施。
- 研究授業（算数科）5年「分数の大きさとたし算・ひき算」
  - ・単元を通して公開授業を実施。教師の計画・助言の下、事前に担当児童と相談して授業を組み立て、児童主体の授業を展開した。
  - ・授業研究会の実施
  - ・授業研究会の内容を含めた、成果と課題を取りまとめる話合いの実施。
- 研究授業（理科）4年「冬の夜空」
  - ・北の空の星の動きについて、予想を練り合う授業。児童は具体物を使い、根拠を示しながら、考えを練り合う授業を展開した。
  - ・授業研究会の実施
  - ・授業研究会の内容を含めた、成果と課題を取りまとめる話合いの実施。
- 研究授業（算数科）3年「分数」
  - ・単元を通して公開授業を実施。5年生の研究

授業を受け、発達段階に応じた児童主体の指導法を工夫し、児童主体の授業を展開した。

- ・授業研究会の実施
- ・授業研究会の内容を含めた、成果と課題を取りまとめる話合いの実施。
- ・全教員による自主的な授業公開の実施。

### 3 研究成果

・積極的な授業公開により、授業の中で、自力解決を促し個の力を育てる「一人学び」、話し合いを中心とした練り合いによって集団を育てる「集団学び」といった時間をしっかりと確保することができ、授業の基本的な流れである「祇園小の授業スタイル」が完成したことが主題に迫る研究の大きな成果と言える。特に、集団学びでは、「児童と児童の発話をつなぐ発問の工夫」についても深まりが見られた。教師が学びをコーディネートできるよう教科や単元、発達段階に応じた教師の出方を意識して授業を行い、主体的で対話的な学習の基礎が確立し「学びに向かう力」の向上につながったと考えられる。また、授業者と参観者が相互に意見交換をすることにより、指導力を高める一因にもなった。

### 4 今後の課題

令和2年は新型コロナウイルスの影響で、授業公開が少なかった。今後は、できる範囲で授業公開を行い、「学びに向かう力の向上」について客観的な評価を実施していきたい。

※ 祇園小学校(ぎおん しょうがっこう)（「祇園」の祇は「ネ」に「氏」です。）

## グループ研究 &lt;10&gt;

研究主題 「気づき、考え、実行する子どもを育てる道徳教育」  
～考えを深め、判断し、行動する力の育成～

学校名 那須烏山市立烏山小学校

校長 小泉 浩

研究者 教諭 高田 孝子 石澤 満 大坪 敏夫 山本 政宏 藤田 友美 平塚 崇

## 1 研究目的

本校では、前年度まで道徳の時間の充実を図り道徳的価値の自覚を深めるために、指導過程を明確にし、各場面において指導を工夫してきた。道徳的実践力を育てるために、体験活動や日常生活との関連を図りながら研究をする。

## 2 研究内容

平成30年度からの学習指導要領の全面改訂に伴い、道徳科の目標が具体的に示され、研究主題を下記のように捉えた。

### (1) 考えを深める

・道徳的価値について考える：価値理解・人間理解・他者理解を深める。

・物事を多面的・多角的に考える。：児童が多様な感じ方や考え方に接することが大切で他者と対話したり、協働したりしながら考える。道徳的価値を自分の体験を通して、よさや困難さ等を理解する。

・自己の生き方を深く考える：道徳的価値に関わる事象を自分のこととして受け止める。他者の感じ方や考えに触れる。

### (2) 判断する

・道徳的判断力：それぞれの場面において善悪を判断する能力。道徳的価値が大切であることを理解し、どのように対処することが望ましいかを判断する力。

### (3) 行動する力

・道徳的実践力：自分なりの生き方の課題を見つける。意欲をもってこれからの自分の生活に生かそうとする。

## 3 研究成果

道徳科において、児童が道徳的価値について考えを深め、今までの自分を振り返ること

で、自分自身の生き方についての課題や目標を見つけ、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことで、よりよく生きようとする児童を育てることができた。

(1) 提案授業は、研究主題に迫るための学習活動を工夫した授業を展開した。

(令和元.9.11 白鷗大 中山和彦先生)

(2) 学年ブロックで提案授業を実施し、手立てについて研究した。(令和元.9.17)

(3) 学校課題に対する共通理解を図り、研究授業を実施した。(令和元.10.16 令和元.11.21)

(4) 2年間の研究計画をもとに、それぞれの年次で深めたい内容と成果を明確にした。

一年次

・考えを深める工夫について研究を進めた。道徳的価値を多面的・多角的に考えた。「行為と行為を生む心」を関係的・構造的に考えた。他者との対話協働により、人間の生き方について深く考えた。

二年次

・道徳的実践力を実現するため、「問題意識」をもち、「自分事」として考え「自己を見つける」授業を行った。

## 4 今後の課題

児童は、主体的・対話的な学びを実現しつつあるが、さらに深めていきたい。

そのためにも、道徳科は子どもたちが未来をよりよく生きていくための心の基盤づくりであることを意識して、毎時間を大切に指導に当たっていかなければならない。

**研究主題** 児童が喜んで体を動かし、体力と運動意欲を高める指導の工夫

**学校名** 高根沢町立東小学校

**校長** 永井 弘美

**研究者** 教諭 西山 翔太 教頭 郡司 典夫 教諭 中田 陽平（令元）

### 1 研究目的

体力と運動意欲の向上を目指した指導を工夫し、喜んで体を動かし、健康や安全を考え判断し、行動できる児童を育成する。

### 2 研究内容

本校は、平成31年度に、施設併設型小中一貫校として移転した。そのため、校庭・体育館は中学校との共有となっている。第2校庭が校舎側にあるが、1,200㎡と大変狭い。さらに、バス通学の児童が全体の半数を占めており、体力向上のための対策が喫緊の課題となっている。そこで、私たちは、教頭の助言を得ながら次のような児童の運動意欲向上に向けた取り組みを行った。

#### (1) サーキット（体づくりの運動）の導入

カードを作成し、自分のペースで、興味のある運動から自由に取り組めるようにした。メニューは、「ホッピング」「バービー」など5種目。

保健委員会主催とし、児童の活動の結果に応じてシールを渡す。その他、委員会児童が【委員会児童の活躍】アドバイスをするなど、自主的活動としての体制をとった。



#### (2) 室内ウォーキングの実施



雨天時、校舎内廊下を一方方向でリズムよく歩く。カードに

【図書室前廊下の様子】自分で何周したかを記録し、シールを貼ることで活動の成果が目に見えるようにした。教師も参加し、怪我等の未然防止に努めた。

#### (3) ヨガ教室開催

当初の予定では親子だったが、今回は、保護者のみで行った。参加者



からは、「家で、【ヨガ教室の様子】子供と一緒に取り組んだ」という声が多く、啓発につながった。

### 3 研究成果

(1) 児童が体を動かす心地よさを感じ、楽しみながら取り組んだ。アンケートでは、運動することが好きと答えた児童が増えた。

(2) 委員会児童が中心となり児童同士のコミュニケーションが増え、称賛しあえる場をつくることができた。

(3) 児童アンケートの結果、「体力が上がった」と答えた児童が7割、「自分は健康だと思う」と答えた児童は9割となった。また、新体力テストでは、50m走の結果が若干よくなっている。このことを学校保健委員会で報告

した。「小さい頃から自分の健康について意識付けをするこれらの取組はとでもよい。ウイルスに負けない体づくりにも重要」と学校薬剤師から助言を得ることができた。

#### **4 今後の課題**

今回は、楽しく体を動かす取組から、体力の向上を図ったが、さらに食育や生活習慣など広い視点から、自分の体について考える児童の育成に向けて、取り組んでいきたい。

戻る

## グループ研究 <12>

研究主題 「遊びのテーマパーク化」で、体育・運動遊びの日常化を図る

学校名 高根沢町立上高根沢小学校

校長 岩村 康朗（令和元年度）

研究者 小池 正夫 安納 孝行 塚原 夏実 芝 真由美 川上 高広 秋澤 昭大  
今平 千歳 手塚 絵理奈 綱川 真衣 萩原 健太 加藤 雄一 野呂 晃子

### 1 研究目的

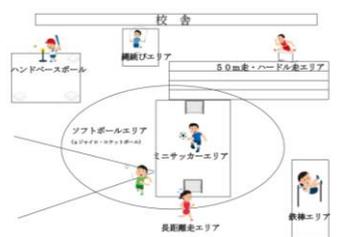
- ・遊具等を有効に活用し、校庭を「遊びのテーマパーク化」となるよう工夫することで体育・運動遊びの日常化を図る。併せて、体力の向上に資するよう努める
- ・養護教諭と連携し、児童に、自己の体の成長に関心をもたせるとともに、目的をもって健康の保持増進に努める態度の育成を図る。

### 2 研究内容

- (1) 運動の日常化を図った取り組み（業間・昼休み）通年
  - (ア) 運動用具等の工夫
  - (イ) 走力を高める工夫
  - (ウ) 運動スペースの確保
  - (エ) 児童の自主的活動を促す取り組み
- (2) 自主的に運動に取り組む態度の育成
  - (ア) 年間を通じて活用できる学習カード
  - (イ) 養護教諭による身長・体重測定（月1回）健やか教室の開催（月1回）

### 3 研究成果

- (1) (ア) (ウ) の組み合わせから



#### x ジャイロ・ロケット

#### ボールの使用 運動スペースの校庭使用例

・投力の向上を目指し、様々な運動用具を使用し、ドッジボールコートを常時使用できるようにした結果、投力の向上が見られた。

- (2) (エ) の取り組みから

#### 日本1週マラソン（持久力の向上）

#### 鉄棒運動学習カード



・学習カード・チャレンジカードを使用することにより、休み時間も学習カードを利用して運動に取り組む児童が見られた。

- (2) (ア) の取り組みから

・児童の自分の体についての関心が高まり、運動を苦手とする肥満傾向の児童も、進んで運動する傾向がみられるようになった。肥満傾向にある児童を対象に健やか教室を開催し、運動以外にも食生活の大切さを指導した結果、偏食を改善しようとする児童が見られるようになった。

### 4 今後の課題

遊びのテーマパーク化については、学習カード・チャレンジカードの効果的な活用を図る必要がある。そのためにも、教員の計画的な指導・助言が必要である。また、技の上達や記録の向上には、教員や児童同士によるアドバイスが必要であると考えられ、技のポイント等を解説した看板の設置などを、今後進める必要がある。

肥満傾向の児童を対象にした「健やか教室」においては、肥満傾向にある児童に限らず、全校児童及び保護者に働きかけ、参加人数を増やす必要性を感じた。

グループ研究 <13>

研究主題 若手教員による主体的なOJTの推進

～「メンターチーム」による自主研修の実践を通して～

学校名 大田原市立西原小学校

校長 篠山 充

研究者 【教諭】：千葉 慎太郎、藤田 美里、藤原 宏美、志賀 美樹恵、櫛田 寛保、  
石原 菜奈美、花山 美歩、富山 靖士 【養護助教諭】郡司 ひより

1 研究目的

本校は、今年度児童数745名、教職員数73名（市費含む）の大規模校である。毎年、新規採用教員が複数配置されるため若手教員が多く、児童も個別支援を必要とする児童や外国人児童も多く、教員として確かな指導力を求められる学校である。担任は、日々の業務に追われ、計画的に自己研修ができない状況である。そこで、校内で研修チームを組んで計画的に、かつ日々の課題に直結する研修を進めることで、教員としての基礎知識の習得や指導力の向上をねらいとした。また、研修を通して互いに相談できる人間関係構築とチーム力の向上を目指した。

2 研究内容

(1) 組織づくりと研修計画の作成

①組織…5年目以内の教職員（9名）

・アドバイザーとして、10年目・20年目研修受講者、初任者研修コーディネーターを加える（3名）

②年間研修計画（定例研修10回）

・メンバーからのアンケートによる研修計画の作成と役割分担

(2) 研修内容

①研究授業に向けての指導案検討会、研究授業後の授業研究会の実施。（年各3回）



【2年目教員による国語の研究授業】

②諸課題についての研修

- ・特別支援教育、人権教育、道徳の授業
- ・学級経営、個人懇談
- ・学級や仕事上での悩み
- ・体育実技指導（陸上競技、マット運動等）

③夏季一斉研修（教科・教科外）の伝達会

④先輩教員からの講話、研修

- ・算数指導法（算数専科教員）
- ・海外教育事情（海外青年協力隊派遣教員）
- ・hyperQ-U結果の見取り（教頭）
- ・通信票の書き方の実際（教頭）
- ・虐待への対応（養護教諭、教頭）
- ・若手教員に期待すること（校長）

⑤教育事情優良校視察研修

- ・横浜市立上末吉小学校の公開授業参加（5名）と報告会

3 研究成果

(1) 他県の学校視察や自校の研究授業のための教材研究をチームで行うことで、授業の構成・発問の仕方や板書計画、教室環境整備の工夫などを学ぶことができた。

(2) 研修で学んだことを発表する機会を全員がもてたことで、相手意識が生まれ伝える技術が向上した。

(3) 日頃悩んでいることをお互いに話し合うことにより、多くの気付きと勤務意欲につながった。また、相互の繋がりが強くなり助け合える存在となった。

4 今後の課題

(1) 研修時間の確保と企画委員会と同時進行で実施しているために、先輩教員から指導を受ける時間の確保が難しかった。

(2) 学級担任以外の教員に対する研修内容を考えることができるとよかった。

## グループ研究 &lt;14&gt;

研究主題 国語科における読む力と書く力の育成

学校名 那須町立東陽小学校

校長 深谷 雅明(令和元年度) 幡野 勇次(令和2年度)

研究者 教諭 大平 弘美 教諭 清野 大樹

## 1 研究目的

本校では昨年度までに、国語科と算数科において主体的・対話的な学びを引き出す言語活動の工夫を研究してきた。その結果、ペア学習やグループ学習によって主体的に楽しく学習に取り組む児童の姿が見られるようになった。

しかし、各種学力調査の結果を見ると、多くの学年において国語科における読解力や書く分野において学習到達度に課題が見受けられた。

そこで、研究教科を国語科に絞り、すべての教科の学習の基礎となる読解力と書く力の向上を目指すことにした。

## 2 研究内容

(1)「読むこと」の、日常指導について下記の点を確認した。

- ① 朝の短時間学習における音読
- ② 家庭学習での音読
- ③ 授業の中での音読
- ④ 本校独自の時間「かっこうタイム」での音読

(2)示範授業に学ぶ(説明文)。

- ① 単元を貫く言語活動について
- ② 単元の指導計画について
- ③ 要約の仕方について

(3)示範授業で学んだことを実践する。

- ① 音読のさせ方
- ② 児童のつぶやきの拾い方
- ③ 発表を話し合いにつなげるやり方

④ 大切な語彙の押さえ方

以上のことに留意し、研究を進めた結果、

- ・自分の考えに理由を付けて言える。書ける。
- ・叙述をもとにして考える。 ことを、どの学年でも 実施していった。「書くこと」については、単元構成・ワークシートの活用について実践していった。



授業の様子

## 3 研究成果

皆川先生の示範授業後、本校教員の国語科指導に対する意欲が増した。教材をどのように考え・捉えて指導していくのか、子供たちに「学ぶ必然」をどのように持たせればよいかが少しずつではあるが、見えるようになった教員が出てきた。これにより、子供たちが意欲的に学に取り組み、叙述に即して読み取れるようになってきた。また、授業に意図的に書く導を入れたことにより、書くことに抵抗がなくなってきた児童が増えてきた。

## 4 今後の課題

叙述に即して読むことについては、教員が普段に留意していることのできるようになってきたが、書くことについては、まだまだできていない。現在は、書かせる機会を多く持つようにしているが、ただ書かせるのではなく、目的と手法について更に研修を深めていかななくてはならない。

## グループ研究 &lt;15&gt;

**研究主題** 深い学びの実現に向けた授業改善 ～指導に繋がる評価の研究を通して～  
**学校名** 那須塩原市立大原間小学校  
**校長** 高久 昭彦（令和元年度） 海老澤 康雄（令和2年度）  
**研究者** 教諭 阿部 考樹（代表） 他9名

## 1 研究目的

昨年度まで本校では、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業が、具体的にどういものだろうかという研究を取り組んできた。そこで、今年度は意欲的な中堅・若手のグループが集い、5年生の音楽科と3年生の算数科の2回の授業を行う研究会を立ち上げた。それは研究授業の本時だけでなく、単元構想を十分に検討し合って、その授業改善に取り組もうとする体制作りを第一目的とした。また、子どもたちの学びの現状を分析し、それぞれの考えやつまづきをいつどのように見取り、どう支援に生かすことができるかその評価の在り方についても目的とした。

## 2 研究内容

- ① 令和元年8月、昨年までの本校の取り組みを学ぶために、改訂の主旨を生かした単元構想図や授業展開を検討する「学び創造プロジェクト」の勉強会を行った。
- ② 同年9月、これまでの深い学びの実現に向けた授業改善を深めるために研究テーマに評価を加味することとし、時中における指導に繋がる見取りの大切さについて、学び合うことにした。
- ③ 同年12月、5年音楽科。「深い学び」と「指導と評価の一体化」を意識し、東京成徳大学子ども学部刀川啓一教授をお招きして研究授業を行った。
- ④ 研究会では各グループに分かれ、学習形態の工夫等について協議し合った。発言に自信のない子を巡視して取り上げ、一人一人の良かった点をコメントするのは素晴らしいという講評を得た。
- ⑤ 令和2年1月、3年算数科。深い学びにつなげるための手立てについて協議し合った。時中にフローチャートやプログラミング的思考を導入して研究授業を行っ

た。研究会では、本市教育委員会の二階堂指導主事から、話合いの役割分担があって身に付けたい力を習得しても、深い学びには、学ぶ喜びや満足感、有用感等の気持ちが必要であると助言を頂いた。

- ⑥ 令和2年2月末。学習定着度を調査する全国標準学力検査(NRTテスト)を実施した。その結果は国語・算数の年計全体への指導対策と一人一人の個人内評価の面談資料に活用した。
- ⑦ 令和2年3月末日、グループ研究のまとめを行い、成果と課題について研究員間で話し合った。

## 3 研究成果

外部指導者を招聘した研究会を行うことにより、その構想と授業展開に自信がいった。特に、



研究会風景

音楽科では、クラスの全児童一人一人が沖縄のイメージを音譜に表して曲として表現することができ、適切な助言で曲作りの楽しさを体感させることができた。また、算数科では、フローチャートの活用から思考やつまづきの箇所が分かり、一人一人に適切な支援をすることができた。

## 4 今後の課題

研究会では、深い学びの実現に向けた授業改善をテーマに1年間取り組んできた。心理テスト・hyper-QU検査でも、3学年以上の多くで満足群が増え、親和的な学級集団であることが分かった。しかし、年度末の学力検査からは、必ずしも喜びや満足感に繋がっていない部分も見られた。目の前の子が一人でも多く深い学びを得られるように、今後も深い学びと評価の研究を継続していきたい。

## グループ研究 &lt;16&gt;

研究主題 主体的に考え表現できる児童の育成を目指して  
～ 説明的な文章の読みの指導を通して ～

学校名 佐野市立葛生南小学校

校長 長竹 克裕

研究者 教頭 福田 まゆみ

教諭 亀田 弘 赤坂 英子 石澤 寛 飯田 文子 高濱 英子 川田 拓郎  
大山 明

講師 尾花 大地 網川 綾子 寺岡 功次郎 養護助教諭 胡桃沢 奈美子

## 1 研究目的

授業の進め方スタンダード（ゴールを意識しためあての設定、自分の考えを書く活動、学習者を孤立させない学び合い、助け合いを大切にした自力解決、話し合いを大切にした練り合い、自分の言葉でまとめる活動、振り返りの工夫等）をもとに授業展開を図り、説明的な文章の読みを通して、主体的に考え表現できる児童の姿をどのように捉えたらよいのか、そのような姿を実現するにはどのような指導が必要かを明らかにする。

## 2 研究内容

- (1) 研究課題の共通理解を図る。
  - ・授業研究の推進について
  - ・学級経営の工夫について
- (2) 校内授業研究会①
  - ・PDC Aサイクルにより、改善を図る。
- (3) 研究課題の推進
  - ・自分の考えを書く習慣を付けさせる工夫
  - ・各学年における説明的な文章を読むことめあての明確化
  - ・ねらいの達成につながるような明確な指示や発問の工夫
  - ・児童個々の授業の振り返りを活用した評価の工夫
  - ・児童が安心して学習に参加できる合理的配慮の工夫
  - ・ICTの活用
- (4) 校内授業研究会②
  - ・PDC Aサイクルにより、改善を図る。
- (5) 計画訪問時の授業研究会③
  - ・PDC Aサイクルにより、改善を図る。
- (6) 研究のまとめ

## 3 研究成果

各学級で「授業の進め方スタンダード」をもとにした授業を行い、ゴールを意識しためあての設定やめあてに対する振り返りなどの実践を行った。また、説明的な文章を読む際には、何について説明している文章なのかを的確に捉えた上で、児童が感想や考えをもち表現できるような指導に取り組んできた。その結果、めあての提示、展開、振り返りという授業の進め方が確立された。説明的な文章の読みについては、児童の苦手意識が緩和されたり段落相互の関係や要旨を捉えたりすることができるようになってきた。

## 4 今後の課題

授業の展開部分については教師の取り組み方にばらつきがあり、学校としてさらに研究する必要が感じられた。そこで、今後は授業の進め方スタンダードをより具体化し、指導のぶれがないようにしたい。また、児童が主体的に考える意識が低い様子が見られた。どの授業においても児童が自分の考えをしっかりともち、その考えを主体的に伝え合い学び合うために、教師がどのような発問、学習形態などの工夫をした授業を行えばよいのかを更に研究したい。



「授業研究会の様子」

グループ研究 <17>

研究主題 「一人一人が居心地の良い学級づくり」について

学校名 宇都宮市立瑞穂野中学校

校長 手塚 弘幸

研究者 教諭 永田 夏子

1 研究目的

現在、いじめや学業不振などで教室にいられないといった児童生徒が増えてきている。そこで、本テーマを設定し、仮説「教師が変われば生徒が変わる」に基づき学級づくり改革に取り組む。

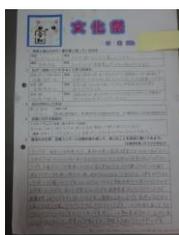
2 研究内容

1 教育相談部会とQ-U研修の充実を図る。

- ・学年ごとに事例検討会を行い、学級への改善策の提案、個々の生徒への適切な支援を行う。
- ・学級全体の状況把握と見直しをする。
- ・教員の生徒理解、生徒への適切な支援方法を習得する。
- ・いじめ・不登校・非行傾向のある生徒への指導・虐待の疑いのある家庭への支援の方法などを検討する。改善の手掛かりが見つかりそうな事例について、SWOT分析を使い効果的な対応方法を考えていく。

2 「居心地の良い学級づくり」を目指す。

- ・ガイダンス機能の充実を図る。4月の学級開きで「3・7・30の法則」を職員で共通理解し、学級のルール作りを行う。
- ・グループワークトレーニングやエンカウンター活動を行い、互いのことを認め合えるよう支援していく。
- ・行事の後に互いのことを認め合う活動を行い、廊下に掲示する。(右写真)
- ・教科横断的な視点で、話し合い活動を取り入れ議論の仕方



を身に着けさせる。発表の間違いを冷やかしたり、笑ったり、からかったりすることがないような雰囲気づくりをする。

3 個々の生徒への適切な支援を目指す。

- ・個々の生徒の特徴を理解する。個々の生徒に対して、支援計画・支援方法を見立てる。
- ・カウンセリング技能を向上させていく校内研修会を行う。一人一人の生徒の良さを認める方法の研究をする。

3 研究の成果

- ・さまざまな場面で生徒の自己肯定感を高める活動を行った結果、生徒が自信を持って、活動に取り組む姿が多く見られるようになった。
- ・教員の生徒への支援方法が、コーチングの技法を活用したことにより、生徒との信頼関係を築くことにつながり、生徒のやる気を引き出し、解決したという達成感や成就感を味わうことができた。

4 今後の課題

- ・Q-U検査の満足群の生徒が全校平均で68.3%から62.5%に5.8%下がった。6月から12月に満足群から他の群へ移った生徒については特に注意して支援にあたり、一人ひとりが抱える悩みや不安を早期に気づいてあげることが大切であると感じた。
- ・全職員がチームとなって、支援に当たりたいと考えたが、まだ全職員の共通理解のもと取り組むことができていない。今後も、継続して取り組む必要があると感じた。

戻る

## グループ研究 <18>

研究主題 地域とともに歩む、生徒のコミュニケーション能力の育成

学校名 鹿沼市立粟野中学校

校長 高木 誠

研究者 教頭 上澤 高子 教諭 鈴木 直里

### 1 研究目的

地域の方と交流を深めながら、地域と学校及びPTAが連携・協働し交流活動を実践することで、心豊かな人間性を育むとともに生徒のコミュニケーション能力を育成する研究をする。

### 2 研究内容

#### (1) オープンスクールと春フェス

##### ①絵画・彫刻の作品展示

作家によるギャラリートークと鑑賞授業

##### ②バラ園鑑賞・遊歩道整備

バラの育成管理作業は、年6回、2ヶ月に1度程度が行われ、その都度、ボランティアを募り活動した。また、校内の遊歩道にシートを張り、その上に木質チップを敷き詰めた。

##### ③ローズクッキーづくり



生徒会が中心となり、「栗中ならではの何かを作ろう」という考えから始まったバラの風味を入れたクッキーづくり。地元の洋菓子店の協力を得て、素材の分量を計算し、何度も試作を重ね完成させ販売した。

##### ④あわの花マップ作成

粟野地区の「あわの花マップ」を作るために、環境委員会の生徒を中



心に月1回希望を募り、地元の方から話を聞く現地調査やプロのカメラマンに教わりながら撮影してマップを完成させた。

##### ⑤栗中カフェ

生徒達が日頃お世話



になっている地域の方を招待し、小学生や保護者等をもてなした。事前に、お客様への対応の仕方、声のかけ方、困ったときの対応の仕方を学習して臨んだ。

##### ⑥ピザ釜づくり

地域の方や保護者の協力で秋フェスに出店するためのピザ釜を作った。



#### (2) 手作りピザづくり



保護者や生徒達が、地元のレストランからピザ作りを教わり、地域の方が石窯で焼き「HEROS」のイベントで振る舞った。

### 3 研究成果

(1) 地域の方との交流を通して、人と接することが苦手だったが自信がついたという生徒が多かった。また、地元愛が芽生え、栗野を誇らしく感じる感想が多かった。

(2) 地域とのつながりが広がり、人や物など学校に「外からの風」が入りやすくなった。

### 4 今後の課題

(1) 地域のボランティアの方と教職員で協働企画している。今後、教職員が変わっても持続できるようにする。

(2) 地元の食材や素材にもこだわっているため、金銭面が厳しい。協賛金など呼びかけたい。

グループ研究 <19>

研究主題 メディア使用習慣を改善する取組み

学校名 矢板市立泉中学校

校長 築瀬 のり子

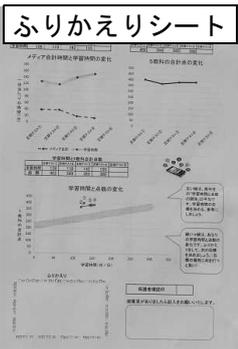
研究者 教諭 齋藤 研一 教諭 岡田 康子 養護教諭 竹島 茉里

1 研究目的

本校生徒のメディア使用時間は長く、家庭学習時間の確保に悪影響を及ぼしている。また、家庭ルールがないなどメディア使用に関して適切な習慣が定着していない実態がある。そこで、メディア使用時間と定期テストの成績を見える化して生徒の意識改革を図るとともに、学校保健委員会を活用するなど保護者とも連携しながら、適切なメディア使用習慣の定着に取り組むことを目的に本件研究を行う。

2 研究内容

(1) データに基づく学習相談



5教科定期テスト前1週間ノーマディアチャレンジシートにメディア使用時間と学習時間を記入させ、テスト結果と合わせてふりかえりシートを全生徒分作成し、担任が資料を使って学習相談を実施した。ふりかえりシートには保護者欄も設け、保護者とも連携しながら進めた。

第3回目からは睡眠時間も記入させ、睡眠不足状態生徒を把握し健康指導にも生かした。また、全校集会でデータ集計・分析した情報教育担当が、本校全体の状況について説明と助言を行った。

(2) 家庭ルールの作成

2学期PTAの際、外部講師を招き親子メディア学習を実施し、講演後、親子で『我が家のルール』を作成した。

親子話合いの様子



「スマホを部屋に持ち込まない」「学習中は居間にスマホを置く」「食事中はスマホを触らない」「使用時間を守れなかったら1週間使用禁止」「課金は親の了承を得る」等々、各家庭に応じたルールが作ら

れた。家で見えるところに貼るなどして、家族全員でルールを共有し約束が守れるよう協力を依頼した。

(3) 小中合同学校保健委員会

小学校段階から適切なメディア使用習慣の定着が求められることから、1小1中の利点を生かして小中合同学校保健委員会のテーマを昨年度より「望ましいメディア使用習慣の確立」に設定し、校医による講和や話し合いを行ってきた。今年度も継続し、その一環で児童生徒が作成した『いずみのメディアルール』をA3判カラーポスターにし全家庭に配布して、一層の周知と実践強化に取り組んだ。



3 研究成果

メディア使用時間と学習時間、テスト結果を見える化したことで、生徒たちは客観的に自分の状況を把握でき改善意欲が増した。その結果、テスト前の学年別メディア平均使用時間は確実に減少し、特に3年生は半減した。テスト前だけでなく日常的にも望ましい効果が現れてきている。家庭ルールの作成や学校保健委員会の開催等により、保護者の理解や協力が得られていることもその背景として大きいと考えられる。

4 今後の課題

適切使用の日常化を一層促すとともに、極端に不適切な使用状況の生徒に対しては、学習や進路、家庭生活など全体から指導し改善を図っていく必要がある。

また、一部保護者には「またメディアの話ですか」との声もあり、子供の発達段階に応じた研修会を行うなど形骸化を防ぐ工夫をしながら、継続して保護者の意識高揚を図っていく必要がある。

戻る

## グループ研究 <20>

研究主題 新体カテスト日本1に向けて ～小中一貫で取り組む体力の向上～  
学校名 那須塩原市立三島中学校  
校長 玉野 陽一郎  
研究者 校長 玉野 陽一郎 教諭 平山 朋弘

### 1 研究目的

体育の授業改善を図ったり、日常生活の中でも運動や体力向上に関する取組を実施したりすることで、毎日カップ「日本1」を目指し、全校をあげて「たくましく生きる力」の育成に取り組む。

### 2 研究内容

#### ①保健体育科の授業改善

##### (ア) 準備運動の工夫

・チャイムが鳴る前に準備運動を始めることで活動量を増やす。

(イ) 新体カテストの結果を参考にし、内容を充実させる。

##### 【屋外】・ランニング2周

- ・体操
- ・ストレッチ
- ・天突き30回(スクワット)
- ・50mダッシュ4本

※三本目終了時に鉄棒で男子懸垂5回、女子3回



(準備体操をしている様子)

##### 【屋内】・ランニング5周

- ・体操

- ・柔軟運動
- ・腕立て伏せ30回
- ・天突き30回(スクワット)

(ウ) 新体カテストの結果をもとに個人分析、目標値及び目標行動の設定

(エ) 授業において、ねらいの明確化及び振り返り活動の充実

#### ②授業外の活動

(昼休み・朝)において補強運動や補強器具の活用をすることにより、進んで運動遊びに取り組む生徒の育成をはかった。

### 3 研究成果

新体カテストにおいて、生徒一人一人に、学校目標値と、現在の記録めあて・振り返りの工夫により、生徒が「授業の中でどのような力を付けるのか」を意識しながら、授業に臨むことができた。「毎日カップ」において、日本1は逃したものの、次点である「日本中学校体育連盟賞」を受賞することができた。次年度に向けての大きな励みと目標ができた。

### 4 今後の課題

- ① 授業の工夫・改善に向け、年間計画の見直し及び小中一貫9年間を見通した確実な授業実践と授業改善に努め、次年度に本年度の取組を引き継いでいく。
- ② さらなる運動の日常化(習慣化)に向けて、体育委員会と連携して、昼休み等の活動を充実させる。

グループ研究 <21>

研究主題 総合的な探究の時間を活かす校内組織の構築  
～カリキュラム・マネジメントの実現に向けて～

学校名 栃木県立宇都宮女子高等学校

校長 赤羽 浩

研究者 教頭・河原 真則 小林 央  
教諭（学習部長）阿久津 浩

主幹教諭・加藤 修 滝田 博之  
（令和元年度教頭）小川 浩昭

1 研究目的

今年度より総合的な探究の時間が実施されることとなったが、「教員間でノウハウにばらつきがある」、「該当学年の担任以外は関心が薄い」など、実践上の課題は多い。本校は昨年度で2期11年のSSH事業終了となり、探究活動推進の新たな体制構築のため、本研究に取り組むこととした。

2 研究内容

(1) 本県の県立学校の実践状況の把握

「総合的な探究の時間を活かす校内組織の構築に関する調査」（11の質問）

第1学年の実践について、全日制59校、定時制・通信制5校、特別支援7校（計71校）の教頭から回答を得た。ここでは、研究の主題に関わる特徴として4点紹介する。

**ポイント1**：本県では企画・推進の中核は、学習指導部及び学習指導主任と回答する学校が最も多く、他県では学習指導部や学習指導主任を置いていないため、教務部及び教務主任が担っている。なお、実施は学年、学科単位で行われることが多い点は他県と共通している。

**ポイント2**：テーマ、領域等として最も回答の多いのは「キャリア」である。次いで「課題研究・探究活動・自由研究」と回答した学校が多い。専門学科を持つ学校、SSH指定校、SGH指定校以外の普通科高校でも取り組みが広がっている。今回の改訂で探究活動、探究学習を重視する考え方がより定着したと見られる。

**ポイント3**：総合的な探究の時間に移行するにあたって、校内組織を改編した学校は全体の三分の一ほどである。委員会やワーキンググループなどを新設したとする回答が主である。

**ポイント4**：「総合的な探究の時間」の実践上の課題を挙げてもらった（12の選択項目から複数回答）。「教材開発や指導方法の工夫」、「ポートフォリオの充実や評価方法の工夫」、「発表会や成果のまとめ・発信の工夫」など直面する課題が上位となっているが、「各教科の学びとの関連の明確化」、「育成を目指す資質・能

力の明確化」、「全体計画・指導計画・シラバスの整備」など、カリキュラム・マネジメントに関連する項目も決して少なくない。

(2) 本校の実践の再確認

令和元年度の第2学年は、1年次にSSHの設定科目「探究基礎」を全員履修している。2年次には総合的な学習の時間で探究活動に取り組んでいる。第1学年は、総合的な探究の時間としてこれに準じた取り組みを進めている。

全生徒を対象として探究活動を推進するため、第2学年・第1学年の推進メンバーが学習部の係に入り、学習部と学年との連携がとりやすくなるよう校務分掌を調整した。さらに、打合せの時間を週時程に位置付けるなど細やかな調整も行った。全体計画では「キャリア形成に関わる探究」と「課題研究」の二つを活動の柱に位置付けた。

なお、本校には昭和23年の新制高校発足当時から現在まで続く「自由研究」の伝統がある。さらに、SSH事業を通して蓄積したノウハウも指導助言に活かされている。

3 研究成果

2期11年のSSH事業では特設のクラス(SS)の教育課程での実践が中心であったが、事業終了によって「探究活動の全校化」の体制が急ピッチで進められたことは大きな成果である。

また、県立学校教頭会の調査研究と連携して進めることで、11月の関東地区発表会の場で、本校の実践を県内外に紹介することができた。

[探究活動の成果は学校HPに随時掲載中]

<http://www.tochigi-edu.ed.jp/utsunomiyajoshi/nc2>

4 今後の課題

コロナウイルス感染症拡大によって、3月の探究活動発表会が中止となり、令和2年度に入っても厳しい制約中での活動となっている。今後はオンラインによる対話の場や少人数の交流会を設定するなど、従来型の規模の大きな講演会や発表会など、イベント開催の見直しが求められている。

戻る

## グループ研究 <22>

研究主題 マイコンを用いたロボット製作をとおしたものづくり人材の育成

学校名 栃木県立宇都宮工業高等学校（定時制）

校長 菅野 光広

研究者 教諭 市村 隆幸 教諭 井澤 宜夫 教諭 橋本 真由美

### 1 研究目的

マイコン (Arduino) を用いたロボット製作をとおして、ロボット制御に必要な技術・技能を習得させると共にものづくりへの興味関心を高めさせたい。さらに栃木県工業関係高等学校ロボットコンテストに出場し、生徒が仲間と協力しながら創意工夫して主体的に取り組むことにより、ものづくりの楽しさや達成感、問題解決能力やコミュニケーション能力を身につけさせ、今日のものづくり県とちぎを支える人材の育成に努めたい。

### 2 研究内容

栃木県工業関係高等学校ロボットコンテスト (アイデアロボット部門) に向けてロボット製作に取り組んだ。この大会は、卓球ボールやテニスボールなどのアイテムを指定されたエリアに搬送・射出し、その完成度を得点で競うものである。「操縦型」と呼ばれる生徒が自らコントローラを用いて操作するロボットと、「自立型」と呼ばれるプログラムを組み込み自動で動作するロボットを各1台ずつ製作する。

#### (1) 操縦型ロボット

操縦型はテニスボールを取り込み、指定された場所に置く動作をする。また、坂道や段差を乗り越えなければならない。足回りはロボットの方向を変えずに前後左右の移動が可能なメカナムホイールを使用した。段差を乗り越えるためにエアシリンダーを使用し、ボールを取り込む部分はスライド式のレールを用い、アームを伸縮させて取り込む構造にした。操縦は家庭

用ゲーム機のコントローラを用いた。

#### (2) 自立型ロボット

自立型は卓球ボールを取り込み、指定された場所に排出する動作をする。取り込み部分はゴム板を付けた軸をモーターで回転させてボールを取り込み、排出の際にはモーターを逆回転させるようにした。

#### (3) プログラム

操縦型、自立型共に Arduino Mega を用いてプログラミング



大会の様子  
ングをした。自立型は時間経過で各動作に移るプログラムにした。

### 3 研究成果

大会は 14 チーム中 7 位という結果を残すことができた。全日制の生徒との交流もあり、生徒はとても良い刺激になったようである。初めのうちは指示を待っている生徒も、ロボットの完成が近づくにつれ積極的に作業に参加するようになった。生徒同士で意見を交換しながらよりよいものを作ろうとする姿勢も見られるようになった。来年も大会に参加したいという感想も得ることができ、ものづくりに対する興味関心を高めることができたと考える。

### 4 今後の課題

今後もロボット製作を継続的に続けると共に、より多くの生徒が学習できるよう実習にマイコン制御を取り入れていきたい。

戻る

## グループ研究 <23>

研究主題 アクティブラーニングの視点からの授業改善

学校名 栃木県立鹿沼東高等学校

校長 梅澤 希人（令和元年度）

研究者 教諭 山口 信一（令和元年度） 教諭 時田 清子 教諭 宮崎 美香

教諭 村山 啓太 教諭 田村 知大

### 1 研究目的

本校では、昨年度から校内にカリキュラムマネジメント(CM)推進委員会を設置し、積極的にCMに取り組んでいる。本委員会では、CMをヒドゥンカリキュラムの視点から捉え、単に教育計画のみでなく、PDCAサイクルにより学校の教育活動の質の向上を図るための様々な取り組みを行っているところである。その中心となる取り組みとして、アクティブラーニング(AL)の視点からの授業改善を推進している。推進にあたっては、AL映像サイト「Find!アクティブラーナー」の視聴契約、プロジェクター、大型ストップウォッチを教室に配備した他、貴教育会の実践研究奨励援助事業(学校経営)により、対話的な学びに有効なA2判ホワイトボードを多数購入して配備し、環境整備を行っている。

さらに、本事業のグループ研究援助予算により、A3判ホワイトボードを全教室に新たに配備して、ALの視点からの授業改善を推進する一助とするためである。



ホワイトボード

### 2 研究内容

ALの視点からの授業を推進するために有効な機材や教具を配備するとともに、映像視聴、授業研究会等により教員のALに対するイメージを上げる取組

- 1) 毎週火曜日第2校時、CM推進委員会を開催し授業改善のための調査・研究会議
- 2) 毎回職員会議の時間短縮に努め、会議後に全教員によるAL推進やCM研究に係るワークショップ開催し、授業改善を啓発
- 3) 県外等のCMやALの各種研修会・講演会へ教員を派遣
- 4) 片面発表ボードA3版磁石付きホワイトボードを新たに配備して、ALの視点からの授業実践における効果的な使用方法を研究・活用
- 5) グランドデザインにおける各教科の授業の取組を全教員で実施並びに授業公開・各教科による授業研究会を開催(10月・12月・6月)



生徒発表

- 6) 有識者(群馬大学准教授 濱田秀行氏)やAL実践者(県立黒磯南高等学校教諭 野澤宏光氏)を招き、ALの視点からの授業に係る校内研究会を開催



校内研修

### 3 研究成果

- 校外・県外の教員研修に出かける教員が増え、生徒に質の高い学びを提供する授業改善の知見を得るとともに、学んだ技術等を生かして様々なALの視点からの授業に積極的に取り組むようになった。
- 協働して学ぶAL型授業に対する生徒の評価は高く、アンケートでも「1人で考えるよりも話し合った方が自分の考えを言語化できる」が88%になり、対話的な授業を通して各教科における見方・考え方を高めようとしていた。
- 校内研究授業は教育活動を活性化し、授業についての協議を通して教員が組織の一員としての自覚を持ち、学校運営への参加意識や同僚性を高めた。

### 4 今後の課題

AL型授業で成果を出すために次のような課題を少しずつ解決していきたい。

- AL型授業における生徒の主体的な学びの深まりや学力向上等の評価・検証
- 教員の教材研究に対する時間の確保

**研究主題** 発酵竹粉の家畜への利用  
**学校名** 栃木県立真岡北陵高等学校  
**校長** 押久保 徹（令和元年度）  
**研究者** 教諭 阿久津 功 飯田 佳史

## 1 研究目的

本校近郊の竹林は所有者の高齢化や後継者不足等の理由で放置されたままになっている。手入れがされていない竹林は、土砂崩れ危険地域に指定されることが多く、大変危険な場所になっている。高齢者が多いこの地域で竹林を適切に管理していくためには、竹の利用促進が欠かせない。そこで竹をナノレベルまで粉砕化したものを3週間ほど発酵させ、乳酸菌を増殖させた竹粉の利用促進を考えた。

この竹粉に含まれる乳酸菌は、雑菌の繁殖を抑制し善玉菌を活性化させる働きがあり、土壌改良材としての利用にも適するほか整腸作用や消臭効果の働きもあり様々な利点が存在する。農業系学科を抱える本校において、この発酵竹粉を家畜飼料・堆肥への応用が可能か等を研究し、今後展開される「総合的な探究の時間」等に活かしたいと考えた。

## 2 研究内容

### ①竹粉に含まれる乳酸菌種の調査

菌種は「ラクトバチルス・ブレビス」でバイオセーフティレベルは人や動物に疾病を起こす可能性のないレベル1であった。ペットや家畜の餌として利用可能であった。

### ②鶏の餌としての利用検証

竹粉を米ぬか等と混ぜ合わせて発酵するとお酒のような匂いがした。これを餌として使用したところ竹粉に含まれる乳酸菌により消臭効果が働き鶏舎の匂いを抑えることができた。また、鶏卵は生臭くなくすっきりとした味で好評であった。

### ③豚の餌としての利用検証

乳酸菌の利点である整腸作用を活かすことができヘルシーで健康な豚が育った。しかし、肉の脂身が少なく食料として不向きであった。

### ④ペットフードとしての利用検証

ペットの肥満解消に犬・猫の餌に微量をふりかけて利用していただいたところ「お腹を壊しやすい愛犬でしたが下痢などの症状が減少した。」等の意見が多く整腸作用が認められた。

### ⑤子牛のミルクに利用検証

下痢しやすい子牛のミルクに竹粉を微量入れることで改善され、子牛のストレスが軽減された。

### ⑥牛舎敷料としての利用検証

竹粉と藁を混ぜたものを使用することで牛舎のアンモニア濃度を抑えることができた。

## 3 研究成果

上記の研究から、発酵竹粉には消臭効果のほか、家畜・ペット等の下痢症状が改善される等の効果が証明できた。これらを広報すること農家に方のさらなる竹粉の利用促進が期待でき竹林の整備伐採を進めるという地域課題の解決に大きく近づいた。

## 4 今後の課題

竹粉利用の幅を広げるためサイレージへの利用を検討している。現在は高価な乳酸菌を購入している農家にとって大幅なコスト削減になることから、引き続き研究したい。

戻る

## グループ研究 <25>

**研究主題** 視覚障害者の歩行指導新カリキュラムの開発  
**学校名** 栃木県立盲学校  
**校長** 伊藤 美喜  
**研究者** 教諭 井澤 素子

### 1 研究目的

従来、J R宇都宮駅東口周辺を歩行指導地域としていた。しかし、学校から遠く、移動に時間を要する。実質的な歩行指導時間の確保が難しく、現在ではあまり使用していない。

そこで、学校から比較的近い地域で、歩行指導に適した場所を再選定し、効率よく指導できる場所を見つけ出そうと、本研究を開始することにした。

### 2 研究内容

視覚障害者の歩行は頭で歩くことであると言われている。それは、頭の中に歩行ルートを描けるかどうかに関わるためである。自分は今どちらの方角を向いて立ち、どちらに向かって進んでいるのかを、視覚以外の情報を得ながら把握する。描いたルートに沿っているのかどうかを白杖を使って確認して歩く。

本校は宇都宮市福岡町にある。大谷からさらに西へ進み、文挟に向かう宇都宮今市線の南側の小高い丘の上にあり、古賀志山に北風から守られている。風光明媚で静かな場所ではあるが、視覚障害者の歩行指導には適さない。

たとえば、「交差点」を理解してもらおうとする。一定間隔で二方向から車が走り、交互に別の二方向から停車する車音がないと信号ありの交差点の存在はわからない。そして四隅を八方位を使って表現し、それぞれが「隅切り」されていて直角ではないこと。「カッコー・カッコー」が東西、「ピヨピヨ」が南北に決められていること等を経験できないとならない。このような場所はこの付近にはないのである。

視覚を使わずに地理的空間を把握するには、頭の中に四方位を用いた座標軸を作り記憶し

ていく方法が有効である。そのため歩行指導地域も「碁盤の目」に近いところが理想であるが、本校周辺には見当たらない。

そこで、周辺地図を見渡し、候補地を絞り込み、実際にアイマスクをして、試行錯誤を繰り返した。

### 3 研究成果

鹿沼の「道の駅」周辺は新しく整備され、区画が分かりやすい環境であった。現在地をつかむための店や家屋が建ち並び、点字ブロックも規格のものが敷かれていた。音響付き信号機とそうでない信号機、歩道のある道路とそうでない道路もある。そして何よりも東西南北の区画が明確な地域であった。そこでわれわれ研究グループは、実地の白杖歩行を数度試み、新カリキュラムⅢを開発することができた。



### 4 今後の課題

繁华な地域を歩けるようになるための新しいカリキュラムをさらに作成し、宇都宮市街のオリオン通りやJ R宇都宮駅及び、東武宇都宮駅構内を颯爽と単独で歩行できるようになってほしいと児童生徒に願っている。そして、社会全般の視覚障害者への啓発と彼ら自身の社会自立を促進させたい。

戻る

グループ研究 <26>

研究主題 特別支援学校（知的障害）における自立課題の工夫と指導  
～子どもの発達水準に対応できる可変的な教材・教具の作成～

学校名 栃木県立富屋特別支援学校

校長 中田 誠

研究者 教諭 星 祥子 教諭 片桐 やよえ 教諭 富山 仁子

1 研究目的

難易度を変えることができる一つの教材・教具を活用することで、子どもの発達水準に対応できる系統的な学習指導を行う。

2 研究内容

教材・教具の作成にあたり、教材を以下の9つに分類した。

①プットイン教材、②1対1対応教材、③マッチング教材、④分類教材、⑤マトリックス教材、⑥作業教材、⑦書字、⑧ことば（単語の学習、文の構成、絵と感情を合わせる）、⑨数（数字の学習、時計の読み方、お金の数え方）

本研究では、この中の「プットイン教材」と「マトリックス教材」に焦点を絞って実践研究を行った。

(1) プットイン教材

この教材は、並び替える、マッチングさせる、組み立てるなどの要素がないものを指し、扱う物をより小さくしたり、大きくしたりすることで、取り組む時間の長さや難易度を変えた。児童が少ない個数から初めて定着を図ることで、その課題に慣れ、個数が多くなっても楽しみながら取り組むことができた。



図1



図2

図1、図2 ビーズの配置や個数を変えた物

(2) マトリックス教材

2つの要素を組み合わせる教材。最初は情報量を少なくし、慣れてきたら組み合わせる色や形などを増やして提示したことで、課題の取り組み方にも慣れ、徐々に多くの要素を組み合わせていくことができた。



図3



図4

図3、図4 提示数を変更した物

3 研究成果

教材をねらい別に分類したことで、児童の発達段階に合わせた教材を考える手掛かりとすることができた。また、易しい段階から始め、スモールステップで行うことは、児童にとって自信をもって取り組むために非常に有効であった。やり方の分かる教材であるため、数や種類が増えて難易度が上がっても、安心して学習に取り組む姿が見られた。

4 今後の課題

いかに児童の発達段階を把握して、次の新たなステップに移る段階を見極めることが一つの大きな課題である。児童の力を伸ばすため、彼らの力がついた適切なタイミングで、新しい教材・教具を提示できるよう、指導記録や日々の実態把握から、どこまでできるようになっているかを理解することに努めていきたい。